

Title	松井清教授の人柄を偲んで
Author(s)	山岡, 亮一
Citation	経済論叢 (1972), 110(5): 322-325
Issue Date	1972-11
URL	http://dx.doi.org/10.14989/133495
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

經濟論叢

第110卷 第5号

哀 辞

故松井 清教授遺影および原稿

産業コンサルティング.....堀	江 英 一	1
創業利得と利益留保.....高	寺 貞 男	27
不生産的階級と生存競争の組織化.....池	上 惇	41
GMにおける予想制度と基準価格制度の形成.....小	野 秀 生	57
個人的消費と労働力再生産の社会的性格.....成	瀬 龍 夫	78

記 事

松井教授逝く

追悼講演（吉信 肅・森下二次也・山岡亮一）

追憶談（田畑茂二郎・杉本昭七・関下 稔・鈴木 明）

故松井 清教授略歴・著作目録

昭和47年11月

京都大學經濟學會

松井清教授の人柄を偲んで

山岡 亮 一

山岡でございます。ついこの間と云いましてもう半年あまり経っておりますが、2月10日にこの教室で私が定年の退官記念講演をやりました時に、その私の講演の後で総轄の挨拶をしてくれまして、私が講演の中で松井君は新幹線のように早いと云ったところ山岡君はデョイチと呼ぶに値すると、この言葉を彼は愛情をこめて話してくれました。私は彼のこのことばに表現されているその友情を素直に受けとったのであります。ただ今デョイチは高知で煙を上げ乍ら力一杯走っております。今日はこのような所でこの様な話をしなければならないとは思ひもよりませんでした。考えてみれば私と松井清君とここにおられます烏君との間、この3人の友人としてのおつきあいと云うものは40年をこえているわけであります。昭和6年に私が高等学校からこの大学に入学して以来のおつきあいでございます。この3人のおの性格も、ものの考え方も少しづつ違うかもしれませんが、私達3人の結ばれは非常に強靱なものがございます。私のおやじが、3人が私の家ではなしている際にふとのべた3人は生涯友人であってくれという言葉は私の脳裏から消えたことはなく、これは遺言ではございませんけれど、——私はおやじの死には出征中のため出会うことは出来なかったのです——この生涯友人であるということ松井君は果してくれたわけであります。私はまだ果し切っておりません。

私は今この席で40年の間の彼とのふれあいを申しあげることにはなかなかむづかしいのでございます。あるいは御家族の方もお聞きにならなかったこともございましょうし、あるいは近かった友人の方、先輩の方も御存じないことも多いかと思ひます。本当に長いけれど短いあつという間に過ぎた40年でございました。今彼の略歴を拝見致しまして何処でどのように彼とおつきあいたか等をたどって参りますことは大変でございます。さき程からのおはなしで彼が如何にすぐれた学者であるか私は今更ながらしみじみとわかりました。案外専門を異にすると、身近の友人の業績もじっくりと読めないくらいに忙がしい今の世の中でございます。したがって偉いなあということを知っていても今日ここで改めて彼が如何にほんものの学者であったかということを心の底から知らされたわけであります。彼の人間について講演をするというのは、あまりに近い友人に話させるのは、酷ではないかと思ひます。私が一個の科学者として、彼の人柄を解剖しながらお話する気には全然なれません。したがってここではむしろ彼のことにについて私と共に思い出して頂くという気持ちで後にはなされるであろう想い出とは少し長く時間をいただいているようなエピソードをまじえながら話してゆきたいと思ひます。

ところで高等学校の時に私は経済学のケの字も知らなかったのですが、大学に入ってから松井というやつが三高時代から経済学を勉強していて なかなか経済学に詳しくということで、私も彼には一目おきながら 彼について経済学を真剣に学ぶということになったわけですが、この間丁度彼のおやじが総長になられた時に、吉田の官舎で島君と共に3人で読書会をしてみようということになりました。これは松井清君の一番楽しい思い出であったらうと思いますし、学生諸君にも随分語っているようでございます。3人三様に何を選ぶかということで「哲学の貧困」と「経済学批判の序説」とブハーリンの「レントナー（金利生活者）の政治経済学」の3つの本をとり上げることになりました。それらを克明にドイツ語で読んでいったのであります。この時に私の経済学の眼が開けてきたかと存じます。彼からも島君からも随分教えを受けました。そして私が経済学を学んで行って何とかかなろうかという自信がついたのもこの読書会でございます。皮肉なことでございますけれど、この頃マルクスなんかを読むことが禁じられた中で、総長官舎の二階で3人が楽しげにマルクスを読んでおったという記憶がございます。涼しい夏の風を受けながら思う存分議論をしたわけでございます。ただブハーリンの立場はベーム・バベルク、フリードリッヒ・ウィーザーなどいわゆるオーストリア学派の経済学を外側から批判するのではなく、いわば内在的に批判するといういき方で、幸いわたくしはその頃少しばかり主観価値説を勉強していたので、少しは彼にも役に立ったように思います。後程彼がハーバラーを訳したり近代経済理論についてかなり関心を持ったのは最初に読んだこういう本の影響があったのではないかとひそかに想像しているのであります。又経済学批判序説をよんだ時には資本論に集大成された経済学体系の中からはみ出しておる国際貿易論を彼はやる、わたしは又同じくはみ出している土地所有論をやる。やはりこれは経済学をやるものにとっては非常に魅力でございます。もうやってしまった所をやるのではない、誰も手掛ていないことを本当に自分の問題としてやるということ、こういう意見では一致したのではないかと思います。私の方はちちとして進みませんでしたけれど、彼の方はどんどん進んで行ったわけであります。これが新幹線ということになったわけですが、まさか新幹線で月世界までつっぱしるとはわたしは夢にも思いませんでした。まだまだ彼に生きてはしかったのであります。野球でも彼はピッチャーをやると、なかなか球威があったわけでございます。ゼミの対抗試合の時のことですが、一寸彼の方が背が高く色が白うございまして私の方は少し背が低くて色が黒いので学生たちが遠くから私達2人の姿をみつめて「ああ小島先生と谷口先生がいっちゃった。」小島先生と思ったのが松井君で谷口先生と思ったのがわたくしでございます。ああ面白い間違い方をしておるものだとか2人で話したことがあります。

丁度こういうふうにもともと学問の専門では違ふ分野へ入って参りましたけれど、ゼ

ミナールにおきましてはうまくこの3人がまとまってまいりました。松井君が谷口先生と八木先生、いわば国際貿易論と農業問題、島君が谷口先生と神戸先生、私が農業問題とそれから財政論、つまり神戸先生と八木先生というように3つがうまく重なり合うような勉強の仕方をしたのであります。これが終生かわらぬ友情を育てるかすがいの1つになったのではないかと思います。

松井君は一面人間味あふれる人間でした。ツウ・メンジュリッヒ、アルツウ・メンジュリッヒという言葉があたるかもしれません。即ちあまりにも人間的であったと云える面があったと思います。あるいは稚気あふれる無邪気な彼の一面これは、この間奥さんに彼の肖像を見せて頂いた時に話したのですが、実に彼は人の心に対していたわりがあったのでございます。ある人はそうではないという人があるかもしれませんが、随分相手の人間について気をつけているわけでございます。気のつかい方がちがっているかもしれませんがけれど、1つの例を申しますと、彼は包容力があったとお話にございましたけれど、彼は本当に包容力があり、人間の心を大切にいたしました。

山口大学で入試問題で新聞紙上にかなり派手にとりあげられたさわぎが起った時のことです、もうどうにもしようがないというところまでいった時にも、彼は自分の研究室員と私の研究室員の2人のためにやはり行ってやろうと云って私と2人で山口まで出掛けました。その大学の自治を犯かさない範囲で出来るだけのことをして、最後まで面倒をみました。帰りの汽車の中でビールで酔っぱらわれたのには閉口しましたが、人間を大事にするという点では徹底しておりました。これが彼に多くの、随分多くの研究教育者を集め、それぞれが大成して行った原因ではないかと想像しております。いろんな点で2人で一緒に行動したのを記憶していることが沢山あります。例えば滝川事件の時ですが、法学部の末川先生、佐々木先生、恒藤先生等立派な行動をなさった先生の中で、経済学部の先生方が、わたし達若い学生の側から見れば、わけのわからぬ何か歯切れの悪い態度でおられ、松井君と私が、松井君の発意に出るものですが、学部の先生方が法学部を助けないのなら、せめて八木先生にゼミでも休んで貰おうじゃないか、八木先生は公平無私で几帳面で、あるいは厳格な先生でございましたが、おそろおそろ2人で「今日のゼミは先生休講にして頂きたいですが」と申し出たところが、経済学部には経済学部の立場がありますと一喝されまして、松井君と私はほうほうの態で逃げかえりました。滝川事件におきましてこの事件は松井君と私の1つの語り草になっております。滝川事件の時に第1教室で最後のけつ別の式が行われた時に、「わあ立派なものだなあ、これが本当の生きた教育だ」と、退官される先生の姿こそが生身の教育じゃないかとほればれと2人で後から見ておったのでありますが、一番立派な風ぼう態度の方が意外にも真先に教壇に戻って来られたことには2人ともひとしく人は見かけによらぬ

ものだなあと、幻滅を感じたこともございます。2人でいろいろな経験をしておりますが、語れば切りがないことでございます。

彼がかねてから奥さんに約束をしていたヨーロッパ旅行も果され、あるいは計画をしていた仕事も殆ど9分9厘まで終えてしまってほっとして安心した隙間に 思いがけぬ彼の死が訪れたのではないかと思います。後から聞きますと、まことに安らかな寝顔であったということです。彼はやることはやった、それで安らかに眠れたのだと思います。息子さんも立派な国際法学者になられたし、お嬢さんも立派に成人された、思い残すことがないとは云えませんが、私の子供がまだ大学で勉強中で先の見とおしも立たないでいる時に、彼はやはり非常にすみやかに人生をフルスピードで走り抜けたと思います。彼はフルスピード操業で何時も休むことなく走っていましたし、今も天国で走っているかもしれませんけれど、にこやかに走っていることと私は思います。

私はそう願っています。あまりまとまりませんが皆様とともに彼の生前を偲ばせて頂いたことを厚く御礼申し上げます。